福島県男女共生センター広報誌

未来館ニュース

MIRAIKAN NEWS

vol.53

CONTENTS

●特集
未来館フェスティバル2014
～ひとりひとりが未来のチカラ～
●シンボルイベント
「母の道、娘の選択」上映&
我謝京子監督トーク

特集

未来館フェスティバル2014
～ひとりひとりが未来のチカラ～

シンボルイベント

「母の道、娘の選択」上映＆我謝京子監督トーク

未来館フェスティバル2014のシンボルイベントとして、ニューヨーク在住の日本人女性のインタビューを通して、“母と娘の生き方の違い”や“日本の女性の強さ”を映し出したドキュメンタリー映画「母の道、娘の選択」の上映と我謝京子監督のトークを行いました。

皆さん、おはようございます。ニューヨークでロイターの記者をしながら映画監督をしている我謝京子と申します。今日は朝早くからお集まりいただき本当に感謝しております。

これから上映する私の初監督作品でもある映画「母の道、娘の選択」は、ニューヨークの映画祭をはじめ日本、台湾、中国、アメリカ、またアフリカのチュニジアの映画祭などで上映されてきました。

可能な限り映画とともに旅をしているのですが、いつも上映前に一つだけお願いすることがあります。映画の中には10人の方が出てきます。ぜひ、それぞれの人生、体験と皆さんのこれまでの人生、体験を比べながら、そして、心の中で登場人物一人一人と会話をしながらご覧いただけたらと思います。

― この後映画上映 ―

私が映画をつくる理由

皆さん、ありがとうございました。私も久しぶりにこの映画を見て、いろいろなことを思い出しました。

実は、今から3年半前の3月11日、この映画を上映するために沖縄にいました。沖縄の空港に到着して、まずは上映の告知をするためにラジオ局に向かったのですが、ラジオ局に到着して自分の出番を待っていたら東日本大震災が起こったのです。そのラジオ局はテレビ局と同じ建物の中にあったので、たくさんのテレビモニターが並び、津波が日本を襲っている映像を目にした時、自分自身の被災体験が甦りました。自然災害と全米同時多発攻撃とはまったく違うものですが、私は全米同時多発攻撃が起こったとき娘と一緒にニューヨークにいて、そこで被災した経験があるので、急に自分が逃げ出すことができない恐ろしい現実の中に入ってしまったかのような気持ちが甦ってきたのです。ラジオに出演中も頭の中ではもちろん東北のことを心配していましたが、一方で、自分の被災体験を思い出していました。

私は記者なので、このまま日本に残って東日本大震災のことを取材したほうがいいのか、それともアメリカに残してきた娘のために帰って母親として娘とともにいるほうがいいのか迷いました。しかし、私のニューヨークでの株式市場を取材する仕事を変わってくれる人が見つからず、そして、母親としての思いも強かったことから、結局はニューヨークに戻りました。ニューヨークに帰った後も毎日、テレビで日本の地震のことが報道されていたので、それを見ながら私には何ができるのかと悶々とした日々を送っていました。

2011年の5月になって突然、「東日本大震災後、復興を目指して頑張っている女性たちの姿を描くドキュメンタリーをつくってください。」という長いEメールが、ある女性から送られて来ました。

はじめは、日本に住んでいない私が東北の被災地に土足で踏み込んでいいものかと迷いましたが、それが、今、私にできることかもしれないと考え直しました。連絡をくれた女性とメールでやり取りしているうちに、私の人生をさらけ出している「母の道、娘の選択」を上映して、見に来てくれた方とお話をして「取材してもいいですよ。」と言われたら取材をしようということになりました。あとから分かったことですが、連絡をくれた女性は、福島出身の女性だったので、彼女は福島のために何かしたいと思っていて、「母の道、娘の選択」についての記事を読んで、いつか一緒に仕事がしたい、我謝さんと映画をつくりたいと思ったそうです。そして、メールをいただいてから6日後にニューヨークから駆けつけ、福島市のコラッセふくしまでこの映画を上映し、上映後には座談会を開きました。

座談会で、「私はこの映画をつくった者ですが、これ

から3.11の復興をずっと追っていく映画をつくりたいと思っています。だから皆さんのことを取材させていただいていいでしょうか。」とお話したところ、「私たちの声や想いを記録に残すことはありがたいことです。」と話してくださいました。こうして出来た映画が「3.11:ここに生きる」です。(注:今回は上映していない)

なぜ私が映画をつくりたいのかと考えてみると、たぶん私自身が夢いっぱいでアメリカに渡った直後に全米同時多発攻撃で私自身が被災したからこそ、痛みの共有というか、映画をつくることで、何かできるんじゃないかと思ったからでしょう。私は子どもの頃から海外に出たいという想いが強く、いつかは自分でつくった映画を持って世界を旅したいという夢がありました。だから、移住を決めたときには、日本からカメラや編集ソフトを持って、アメリカに娘とともに引っ越してきたわけです。

そして、いずれ映画をつくろうと決心した矢先に被災してしまったので、映画どころではなくなりました。明日着ていく洋服もない状況の中で毎日テレビに出なくてはならず、どうしていいか分からなくなっていました。

ニューヨークの自宅は、ワールドトレードセンターに近く12月まで戻れませんでしたが、この映画の中に出ている投資銀行に勤めていた女性やシングルマザーの方が「一人で悩む必要はない。」と声をかけてくれ、助けてくださいました。

映画に出てくる女性たちは、日本の家族と離れてニューヨークに住んでいますから、お互いに助け合おうという気持ちがとても強く、それで、私も周囲から助けてもらったおかげで立ち直ることができました。周りの方にも励まされて心も回復して元気になってきたら、やはり映画をつくりたいという思いがまた復活してきました。

アメリカで頑張る日本人女性の物語から普遍的な母と娘の物語へ

映画をつくるというのは本当に大変で、何人もの方に迷惑をかけてお話を聞いて、それを全部見て、積み木のように重ねていきます。何十時間、何百時間、何千時間もかけて、例えば、だいたい1分間をつなぐのに1日ぐらいかかる作業です。ですから、本当に自分が撮りたいというテーマにしなければ、映画を完成させることはできません。そこで、何をテーマに映画をつくろうかと思ったときに、私が助けてもらったアメリカで頑張っている日本の女性たちのことを描きたいと思いました。みんな家族から離れて仕事をしているので、彼女たちはどうして日本ではなくアメリカで働きたいのかそして生活したいのか、そういうことを映画にしようと思ってカメラを回し始めました。

これが私の初監督作品でしたから、はじめはいろいろな財団に応募して、助成を受けてつくろうと思っていたのですが、実績がないためすべて落ちてしまいました。そのため、自分のお小遣いを貯めては撮影して編集するという日々が続き、ようやく36分間の映画を完成させました。今日見た映画は85分ですが、最初は36分の短編映画でした。アメリカのある映画祭に応募し上映したところ、「とても面白い映画だし、飽きないけれども、日本のことはよく分からない。急に日本の女性たちが出てきて、日本を離れた理由を話しているのを聞いてもなかなか理解できない。だから、覚悟を決めて、あなた自身の人生もさらけ出して、ストーリーをつくりなさい。」と言われたのです。自分で自分の人生を話すというのは本当は気が進みませんでしたが、覚悟を決めたわけです。

映画を撮影しながらいろいろな女性たちの話を聞いているうちに、彼女たちは自分と母親世代との比較をしていることに気づきました。だから、私も自分と母の人生を比較して話をしたほうがいいと思い、自分だけではなく母も引っ張り出して、さらに私には娘がいるので娘にも映画に出てもらったら、結果的に85分間の母娘3世代の映画になっていきました。つまり、横糸はニューヨークで頑張る女性、縦糸は母娘3世代を描いて、つくり終えてみたら普遍的なテーマの映画になったのです。ニューヨークには外国からだけでなく故郷から離れて頑張ろうという人が多く集まってくるので、ニューヨークの人たちの共感を得て、それから徐々に世界各地で上映することになりました。

いまこの瞬間を大切に生きて、マイナスをプラスに変える

結局、私自身の全米同時多発攻撃「9.11」の被災体験がなければできなかった映画ですが、この映画とその後の東日本大震災の映画をつくって分かったことが一つあります。被災体験は一人一人まったく違う状況なのに、皆さん同じことを言うのです。「どんなに過去に戻りたくても絶対過去には戻れない。どんなに未来のことを知りたくても、私たちは今を生きているから、未来のことは分からない。じゃあ何ができるかといったら、今、この瞬間を大事に生きるしかない。」ということでした。本当にそのとおりだと思います。私も毎日毎日忙しくても、一生懸命いちばん大事だと思うことを最初にやろうと考えるようになりました。

だから、この「女と男の未来館」から依頼があったとき、ニューヨークから飛んでくるのはとても遠いのですが、絶対皆さんとお話をしたいなと思って、ここに来ました。

映画の中に出てくる阪神淡路大震災で被災した神戸の女の子も、私の娘も、そして、昨日は福島市の桜の聖母短期大学にも行ってきましたが、そこの学生さん

たちの話を聞いても、本当に子どもってすごいと思います。何がすごいかというと、阪神淡路大震災も東日本大震災も全米同時多発攻撃もそうですが、そういう過酷な体験をしてしまったことはとてもつらいことでしょうし、大人の目から見たらとてもかわいそうな体験かもしれません。ですが、そこから子どもたちは確実に学んでいるということです。

私の娘は、全米同時多発攻撃の時にワールドトレードセンターの真下の小学校に通っていたので、とても心配で、あの瞬間、私はひょっとしたらビルが倒れて娘の小学校が崩壊してしまったらどうしようと思いました。地下鉄も止まっていて娘を助けに行けませんでしたが、ほかのお母さんが助けてくれて、娘はロイターまで3時間歩いて逃げて来ました。

彼女は大学に進学するときに「理工学部で材料工学を勉強して、強い素材を開発したい。」と言ったのです。私は、この子は全米同時多発攻撃の自分の悲しい体験をプラスに変えているのだと分かりました。実は、彼女自身は被災してから13年経って初めて、その関係性に自ら気がついたようで、「あの9.11を体験したからこそ私は今、理工学部で材料工学を勉強しているんだね。」とぽろぽろと泣きながら話してくれました。マイナスは自分の心の持ちようでいくらでもプラスに変わるということを彼女もこの瞬間に感じ入った様でした。でも、人生はきれいごとだけではありませんから、マイナスの体験をした直後にプラスに変えられる人は、そうはいないと思います。

私自身もすごく時間がかかって、被災した直後はアメリカまで子どもを連れてきたことへの後悔などマイナスの思いばかりでした。でも、やっぱり人間の心はすごく強いもので、時間とともにだんだん自分がやりたいことを思い出して、自分の心を整理するためということもあり、いつも自分の身近にあった映像を通して何かやったら見えてくるかもしれないという思いで映画をつくり始めたのです。

それぞれの選択が全部正解。それをお互いに認め合うことが大事。

一方で、心のどこかで「日本だと仕事が忙しすぎるとか、子育てとの両立ができないといって、私はアメリカに逃げたのかもしれない。」という、罪悪感のような思いを持ち続けていました。しかし、映画に登場する一人の女性は、「アメリカ人と離婚したから恥ずかしくて日本で住んでいけなくなって私は逃げた。」という人もいる一方で、別の女性は、「私は逃げたんじゃない。アメリカで新しい人生をつくりたかったから来たんだ。」と言う人もいます。同じアメリカで頑張っている人の中でも、日本から逃げてきたと思う人もいるし、逃げたのではなくてチャレンジだという人もいて、その両方の価値観を聞いたときに、これはどっちでもいいのだと私は気がつきました。これだけ多くの想定外のことがいろいろ起こっている世の中で、それぞれがそれぞれの判断で、それぞれの決断とか選択をしていることはたぶん正解なのだと思います。どれか1つが正解ではなく、それぞれの選択を認め合うことによって、私たちはもっと楽に息がしやすい世の中になっていくのではないかと、自分の体験を通してこの頃考えています。

繰り返しになりますが、過去には戻れないし、未来は分からないのです。ですから、今この瞬間に福島の皆さんと「女と男の未来館」で、この映画を共有できたことは本当に素晴らしいことで、感謝の気持ちでいっぱいです。

感想・質疑応答

フロア1　女性ももちろんですが、この映画をぜひ中学生、あるいは高校生、それから大学生など若い人に見ていただきたいと思いました。

というのは、3.11を体験して、地域の人に本当にお世話になったので、どうしたら、自分はあのときの思いを地元に還元できるのか、お世話になった人に恩返しできるのだろうかと言う子どもたちが最近は多いなと感じるものですから、ぜひ若い人に見ていただきたいなと思いました。

我謝　本当にそうですね。皆さんも分かると思いますが、被災すると本当に様々な方たちに助けられますよね。でも、ありがたいけれど、助けてもらうばかりだとだんだん苦しくなってきて、やっぱり力が戻ってきたときにはできることをやってお返ししたいと思うものです。

今日のテーマも「ひとりひとりが未来のチカラ」ですが、子どもたちが自分の得意分野でどうやって社会に還元していくのかを考えて、未来に向けてこのつらい体験をマイナスからプラスに変えていこうと思いながら力強く生きていけたら、よりよい国になるだろうと感じています。

そして、アメリカで、特に3.11の映画を見た方は、みんな驚いて「女性たちが、福島を、東北を立て直そうとしていることが分かって、この映画を見て本当によかった。」と言ってくれます。各地で60～70人の女性たちを取材したのですが、東北に取材に行く前に、東京のカメラマンから「京子さん、関西の人と違って、東北の人はあまり心を出さないから、きっと取材しても本音は聞けないよ。」って言われたのですが、私は「本当にそうかな?」と思い、あまり先入観を持たないで行こうと決めました。

皆さんの話を聞くだけでなく、私も「自然災害と全米同時多発攻撃は違いますけれど、9.11で被災したんですよ。あのときは本当につらかったです。」という話をしたら、彼女たちも心を開いてくれて、本音の話ができま

した。多くの人たちは、記者は取材する方で、相手は取材をされる方だという先入観を持っているのですが、実際は違っていて、結局、取材されている人たちが私たちのことを見ているのです。記者が分かったような顔をした生意気な人だったり、心がない人だったら、誰もその人には話をしたくないですよね。ですが、心が通じ合っている場合は、本当は10くらいの事を話そうと思っていたけれど、どんどん膨らんでいって、本人も気がつかなかった新たな思いなどを話してくれるという事もあるのです。

それから、いろいろな国で3.11の映画を上映しますと、実は何人もの方が私のところに謝りに来ます。「この映画を見るまで、私たちは上から目線で、被災した人はかわいそうな人という目で見ていましたけど、そういうことじゃなかったということがよく分かりました。大変な思いをして苦労しているけれど、工夫して、自分は何ができるのかということを考えながら頑張っている、そういうことが映画で分かったのですごく反省しました。」と言うのです。だから、先入観を捨てて、映画を見て、一人一人が何を感じるのかということが大事なのだと分かってよかったと思いました。

たぶんこの「母の道、娘の選択」を見て、よく分からない映画だったと思う方もいらっしゃるかもしれません。なぜかというと、私は一つだけの答えを皆さんに押し付けるために映画をつくっていないからです。この映画もそうですし、3.11の映画も、もし機会があったらご覧ください。一人一人が、自分だったらこうかな、私はあの人のここには共感できるけど、ここの感じ方が違うというように、自分の心を確認するための映画があってもいいだろうと思っています。

これからも映画づくりを続けていく過程で、復興がどんなふうに進むのかを、女性の目線で皆さんと話し合いながら見つめていきたいと思います。

フロア2　この映画のタイトルは、とてもすてきな英語のタイトルですが、作品ができてタイトルを決められたのか、このタイトルをもとに作品をつくりあげたのですか。

我謝　とてもいい質問をありがとうございます。

タイトルは、最後の最後まで決まりませんでした。36分バージョンをつくったとき、日本語のタイトルは「日本を越えた女たち」、英語のタイトルは「Going beyond Japan」という鼻持ちならないタイトルで好きになれませんでした。もっと普遍的なテーマがあるのではないかと思って、何回も何回も編集テープを見続けました。

すると、映画の中で女性たちが「選択」という言葉をたくさん使っているということに気付きました。

そして「日本は茶道、華道、子育て道って、『道』がいっぱいあるから大変なんだよね。」と言っていたことが印象的だったので、道という言葉を選びました。母親世代の母の道、そして、私たちの世代、娘の世代の選択ということで、タイトルが「母の道、娘の選択」になりました。英語はそのまま直訳で、「Mothers' Way, Daughters' Choice」としました。そこに“日本”という言葉はまったく入っていませんが、母と娘の生き方というのは普遍的なテーマだからこそ世界中で受け入れられる作品になったのだと思います。

日本の女性たちは もっと自信をもっていい。

最後に、日本の女性はもっと自分に自信を持ってください。本当に日本の女性は優秀です。普段から機微を感じながら生活していますので、具体的にどうしたらみんなが喜ぶかという感覚が身についていて、すごくいい仕事をする人がニューヨークにもたくさんいて、日本の社会でも生かされていると思っています。それが当たり前のことになっているので、自分たちの良さに気がついていないのかもしれません。

私は海外で仕事をしているからこそ分かるのかも知れませんが、世界レベルでみても日本の女性は優秀だと思いますので、これからは女性ももっと自信を持ち、男性とともに歩んでいくことが日本の未来の姿だとニューヨークから見ていて感じています。

ですから、落ち込むこともあると思いますが、ぜひ自分に自信をもって進んでいっていただけたらうれしいです。

本当に皆さん、今日はどうもありがとうございました。

我謝京子監督（がしゃきょうこ）　■プロフィール

ドキュメンタリー映画監督・ロイターニュースアンカー

87年、テレビ東京入社。2001年、ロイター社のテレビレポーター・プロデューサーとしてニューヨークに赴任。2005年、監督として「母の道、娘の選択」制作に着手し、2009年に完成。東京国際映画祭、マイアミ国際女性映画祭、チュニジア国際映画祭、台湾女性影展など多数の映画祭で上映された。2010年度ニューヨーク国際インディペンデント映画祭「観客賞」「最優秀文化ドキュメンタリー賞」をダブル受賞し、日本人女性監督として初の2冠達成。ニューヨーク女性記者会「フロントページ賞」受賞。

未来館フェスティバル2014

「未来館フェスティバル2014」を、9月20日（土）・21日（日）の2日間開催しました。
「復興」と「女性の活躍促進」をキーワードに「ひとりひとりが未来のチカラ」をテーマとし、
県民参加企画団体や未来館フェスティバル実行委員会・運営ボランティアの
皆さんと一緒に取り組みました。

●未来館ネットワークカフェ

●認知症介護セミナー

中南米民族舞踊チャカレーラ
●コンフル・エンシア

ヒップホップダンスパフォーマンス
●パラダイス BOX NEO

研修ホール

介護事故を防ぐために
●（一社）日本福祉用具供給協会東北支部福島県ブロック

介護用品の説明を受け、
実際に体験も。

●菊松くんと銃太郎くん

二本松市の公認キャラクター
菊松くん、銃太郎くんが
皆さんとふれあいました。

ベリーダンス SHOW
●Harumi Bellydance Class

1F

にほんまつ一店逸品研究会
●二本松商工会議所一店逸品運動推進委員会

二本松のこだわり・
自信の“逸品”を販売。

ふくしま型ユニバーサルデザイン実践発信事業
●福島県青少年・男女共生課

ユニバーサルデザインの
クイズに挑戦。

木の枝クラフト体験教室
●NPO法人福島県もりの案内人の会

森からの贈りもの、
木の枝でクラフト体験。

知ろう!活かそう!福祉機器●福祉機器展示室

玄米ダンベルの体験や
毛糸で人形などを作りました。

2F

「誰でもできる家事・子育て!!
…その実践法教えます」
●NPO法人OYAKODO ふくしま

男性の育児・家事参画から
見えてくる子育てを学びました。

ポスター展示
「男女共同参画の視点からの復興」
●復興庁男女共同参画班

パネル展示で復興への
取組を紹介。

福島移住女性支援ネットワーク
（EIWAN）活動紹介
●福島移住女性支援ネットワーク（EIWAN）

多文化共生を目指して
支援活動の紹介。

食と環境について考えてみませんか?
●福島県消費者団体連絡協議会

環境にやさしい生活について
考えることができました。

「イップク イカガ…!」茶道宗偏流お茶会席
●茶道宗偏流福島西支部穂積宗雪社中

茶道の文化と伝統を
美味しく体験しました。

チャリティバザー
●二本松市婦人団体連合会

お値打ち品がたくさん。

バルーンアート●新福島芸能倶楽部

子ども達に大人気でした。

孫子老カフェ(ベビーからシニアまで)
●NPO法人まごころサービス福島センター

自分らしく、地域の中で助け合って
生きるための意見交換をしました。

3F

「イップク イカガ…!」茶道宗偏流お茶会席
●茶道宗偏流福島西支部穂積宗雪社中

シンボルイベント講師の
我謝京子監督も
お茶をいただきました。

一行からはじめる読書案内●図書室

センター図書室の本を職員が
選び、印象的な一行を抜き出して
展示しました。

昔なつかしいかみしばいやさん
●じゃっくあまの

センターに関するクイズも
出され、大人から子どもまで
楽しんでいただきました。

4F

**アメリカ・ケンタッキー州の
ウッズランド高校生と福島の高校生
との交流支援**
●(一社)国際女性教育振興会福島県支部

ウッズランドの高校生と
福島の高校生の交流支援
の様子を紹介しました。

女性が輝く地域づくり・2014
●県北地区磐青の会

女性の人権についての課題報告と
高齢者サロン立ち上げについて
報告しました。

学習会「つながってエンパワメント!」
●NPO法人市民メディア・イコール

ネットワークの強化と効果的な
情報交換の方法を学びました。

**電話相談から見えてきたこと
～男女共同参画の視点から～**
●NPO法人ウィメンズスペースふくしま

福島の女性の現状の報告と
自分らしく生きるヒントを
学ぶワークを行いました。

5F

高齢者疑似体験●福島県社会福祉協議会

疑似体験用具をつけて、
加齢による体の機能の
変化を体験しました。

大盤ぶるまい●二本松市婦人団体連合会

二本松市地域婦人団体
連合会にご協力いただき、
そうめんを無料でサービス!!

屋　外

●屋台「みらい」

人権啓発
●福島人権擁護委員協議会二本松市部会

人KENあゆみちゃん・まもる君が
エントランスでお出迎え。

一行からはじめる読書案内

～未来館フェスティバル2014図書室展示～

センター図書室から職員が本を選び、そこから印象的なとっておきの一行を抜き出して展示しました。

『男らしさ、女らしさって何？ こんのひとみ心の言葉④』

こんのひとみ／文
丸山誠司／絵　ポプラ社　2003年【J/1103/コ】

男らしさ、女らしさとは何か、著者からあなたへ優しい言葉を詩にして贈ります。その他、短編の物語や、中学生たちの本音座談会も同時に掲載されており、悩める子どもたちへ語りかけます。

だれが決めたの？
男の子は青って
だれが決めたの？
女の子は赤って

『女も、不況？』

酒井順子／著　講談社　2009年　【6102/サ】

リーマン・ショック以降、目に見えて日本の企業が不況の渦に巻き込まれていきました。では、女性の生活も不況…？現役独身女性としての目線から、身近なエピソードやちょっと気になるニュースを切り取って語ります。

男でも女でも、
料理が得意であろうと
「そういう人もいますよね」
という社会になれば
いいなぁと思う私。

事業開催のお知らせ

男性のための男女共同参画基礎講座

「イクメンのすすめ～子育てを楽しもう!～」

平成27年1月31日㈯ 13:30～15:00

講師：特定非営利活動法人OYAKODOふくしま
代表理事 横田智史さん

「イクメン」という視点から、男女共同参画についてアプローチする講座を開催します。

未来館健康講座

平成27年2月21日㈯ 予定

女性の健康についての講座を開催します。

詳細が決まり次第、ホームページやメールマガジンでお知らせします。皆様の御参加を心からお待ちしています!お楽しみに!

福島県男女共生センター広報誌
未来館ニュース MIRAIKAN NEWS
2014.12 vol.53

■編集・発行
(公財)福島県青少年育成・男女共生推進機構　福島県男女共生センター(女と男の未来館)
〒964-0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1
TEL:(0243)23-8301㈹　FAX:(0243)23-8314
ホームページアドレス：http://www.f-miraikan.or.jp
メールアドレス：mirai@f-miraikan.or.jp
女と男の未来館